

〈翻印〉推定・永代美知代作「老嬢の告白」(1)

有元伸子

【解題】

本稿は、『中央新聞』の家庭頁に一九〇九(明治四二)年六月一三日から八月一日まで掲載された無署名の連載小説「老嬢の告白」(全四三回)を、二回に分けて翻印するものである。本作は、広島県出身の四二歳の「老嬢」の「私」が自身の激しく転変する人生を回想する物語である。無署名ではあるが、掲載紙、物語内容、文体の特徴などにより、永代美知代(岡田美知代、一八八五〜一九六八年)の執筆だと推定される。

本作については、既に別稿「資料紹介」『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」一付 岡田(永代)美知代著作リスト一「『内海文化研究紀要』四一、二〇一三年三月)において、掲載紙の概略、作家紹介、作品の梗概、執筆者推定の理由、モチーフの考察、同時代における受容、作品評価等を行っているので参照いただきたい。また、作品の新聞紙面の画像は、著作権継承者の許可を得て、「広島大学学術情報リポジトリ」および「広島の女性作家・岡田(永代)美知代」ホームページに公開しており、PDFファイルで閲覧可能である。

【凡例】

・連載の初回から第三回までは「心を傷ましむる 老嬢の告白」のタイトルであったが、第四回以降は角書が落ちて「老嬢の告白」となった。本翻印でも「老嬢の告白」とする。

・「老嬢の告白」には連載回数が明記されないが、本翻印では(一)で通し番号を付した。また、各回の末尾に付された「(つゞく)」は省略した。

・原文の旧字は新字に改めた。

・原文は総ルビであるが、必要最小限の箇所のみルビを付した。また、ルビには踊り字(く)は用いず、仮名に戻した。

・活字のつぶれによる判読不明箇所や脱落箇所は、□で代替した。

・明らかな句点(。)の脱落は補った。

・原文では「▲」の後の数文字は表題替わりにポイントが大きい。それを本翻印では太字で示した。それ以外の本文中の大活字については、ポイントを変えていない。

・女性同士の愛を描いた第十七回は、複数行にわたる不自然な空白箇所が三カ所あり、原稿通りに活字を組んだあとで、編集サイドの判断によって削除したものとされる。それらの箇所は〔空白行〕と記した。

* * * * *

老嬢の告白

(一)

世に所謂「老嬢」てふ語には言ひ知らぬ悲痛の意味が含まれて居る。一般には常に軽侮の語となつてゐるが細かに其履歴や境遇に就て聞けば血湧き涙流るゝ数奇を極むる運命の下に浮薄なる軽佻児の犠牲となりつゝあるのである。こゝに掲ぐる所は位地も教育も共に高き某老嬢が不図したことから其の虚飾や腹藏なく明らかに一生の懺悔を

して下さった事実談である。之を聞ける記者は悲風慘雨交々至るの感に堪へずして幾度其の袖を絞つたか分らない。今之を發表するは其物語りに深き興味を覚えたりといふよりも寧ろ憂き波風に曝されたることなき深窓の御婦人方や、心弱き女性の嘆きを構はずして嘲りの声を放つ世の輕薄児を戒めたく且はこの隠れたる老嬢に温かな同情の涙を捧ぐる方もあつたらばと考へた結果である。勿論此物語は決して空想ではなく又毫末の附加へもせず事実有の儘の話を書き綴つたのであるから其御心持にて愛読されし（一記者）

▲私は老嬢の一人に違ひありません。人生の幸といふ幸、喜びといふ喜びの源である家庭を持つたこともなく、従つて良人もなければ子供もない、天上天下に自分一人の世界を作つて、其の中で侘びしい生活が続けて来たので御在ますけれ共同じ血と同じ情を持つた人間ですもの、時には血を湧き立たすやうな刺激にも会ひ、時には泣いて半夜の床を湿ほすやうなことも御在ました。月の良い夜、風の涼しい夕べ、今となつても私の心は想ひ出の数々に動かされて、人様に見せぬ涙にくれることもないとは申しません、併し私の心は永い間の世の波に揉まれて、今では地球の表面の如くに固まりました、涙は地殻の底に燎ゆる永久の火です、胸を焼き心を破ることがあつても容易くは人様の前に現はさぬだけの意志が出来ました、それを人様は

▲独身者の片意地と被仰います。全く然うだと私も思つて居ます、然うと思へばこそ、耻し気もなく昔の懺悔をお聞かせすることが出来るので、若し私が昔の儘の娘気で居たらば一口のお話はさて置いて、又かうした懺悔の種も時かなかつたで御在ませう。さて私は今年で四十二歳となりました、四十二と一口に云へば云ふものゝ、此の間に歩みました憂き艱難の幾山河、此の間に葬りました耻、怖れ、喜びの幾百千は決して忘れることでは御在ません、併し世に「老嬢」とか銘打つて書かれた小説も沢山御在ますが、老嬢の生涯は決してあんな浅薄な単純なものではありません。これを理解するのは私共のやうな、

自分自身が老嬢の経験を味つた者でなくては解りますまい。仍で私の▲生地は広島県の田舎で御在ます、祖先は土地でも有名な豪家で數十代続いた家柄であつたのですが、私の父の代から次第に家運が傾むき、私の生れました頃は辛と私達の教育費が取残されて有つた丈けの資産となつて居りました、兄弟は姉が一人に弟が一人と妹が一人づつ、私を合せて四人で御在ました、長女と生れました私の姉は私が云ふのも如何ですが、それは顛ひつき度いやうな美人で幼さい時分から人様に可愛がられました。その姉が大きく牡丹を染め出した友禪縮緬の振袖を着て村の祭にお詣りした姿は今も鮮かに私の記憶に残つて居て、尚ほ眼の前に泛び出るやうで御在います。

▲悲劇の発端 併し皆様は私が何故こんなに姉の容色を讃め立てるかとお思ひでせう、けれ共お察し下さいまし、私が淋しい独身生活をするやうになつた第一の原因は此処に秘んで居るのです。その理由を知り度いと被仰るのですか、では、皆様どうか私の顔、私の容色を御覧下さいまし、「これが其の美人の姉の妹か」と皆様は屹度御自分の眼をお疑ぐり遊ばすほど、私は変な顔に生れついたので御在ます。

(二)

▲「お前は不容姿だ」と云ふ一言は、私が物心つきますと同時に常に家族から浴せ掛けられる言葉で御在ました、村のお祭りにも、親戚の祝賀会にも、姉や妹を美々しく着飾らせて連れて参る、私の両親は、其の中へ私を交へるのを喜びませんでした、着飾れば着飾るだけ、姉や妹に容色劣する私を、出来るなら尼寺へでも与つて了い度いと思ふやうな気色が、ともすると両親の態度に露はれるので御在ました、血を分けた両親から疎まれるやうな顔に、何故私は生れついたのでらうかと、私は幼な心にも然うしたことを考へないでは居られませんでした、事実世の中に女ほど自分の容色を気にする者はありません、如何に子供とは云へ、人並の心を持つた私は「汝の様な不容色者は大きくなつてもお嫁に貰ひ人がない」と云はれる度びに、竹鋸で切られる

やうな苦しさを感ぜずには居られませんでした。纏てその苦しさが嵩じると

▲衣服も白粉も不要 花簪も人形も要らぬ心持になりまして、たゞ一人部屋の中に蔵れて泣き暮すか、ブラ／＼として野山を逍遙ひますか、何れにしても成るべく人様の目に懸からぬやう、顔を見られぬやうにと自分から気を注げ初めました。幸に自分の不運を悲しむ計りで人様を恨む心持にはなれませんでした。御在ましたが、若し一足を踏まれば、此の上に取回しのつかぬ偏屈者になつたらうと未だに其の時分の事を考へて戦慄するので御在ます、併し人様を恨まぬとは云へ、然した不運の日の下に生れた子供心は、幾らか曲けないで居やう筈がありません、六ヶ敷く云へば厭世とでも申しませうか兎角に世の中の賑やかなことが嫌ひで、自分はもう一生田舎に蔵れて暮さうとか、どんな事があつてもお嫁には行かないとか、随分大人染みた考へを、確然と頭脳に持つて居たので御在ました、今から思へば其の時分の考へが、私の

▲独身生活の土台 を固めたやうで御在ます、「三ツ児の魂百までも」とは全然馬鹿にされぬ諺では御在ませんか、扱て私は小学校へ入りました、小さくなつて毎日泣きながら通学致しました、学校では遊ばず語らず、たゞ一人自分から除者になつて勉強し、時間が済むと走るやうにして宅へ帰り、一間に籠つて勉強したもので御在ます。其のお蔭ですか、学芸の方は何時も成績が優れて居まして時には百点のものを百三十点も頂いたことが有りました。子供の美貌を喜ぶ私の両親は子供の学業の上出来を喜ばぬ筈がありません、私が学校へ上つてからは両親も前ほどに情なく当らず、「此の娘は何時も一番で御在ます」と人様に私のことを吹聴するやうになりました、私は別に両親を恨む者ではありませんが、慪ういふ風に子供を扱かう方が若し世間にお有るならば、私は泣いて其の不心得を御忠告せねばなりません。

(三)

▲男のやうな風俗 をして斯く一生懸命に勉強して居ります間、歲月は流れるやうに過ぎ、十五の春には滞りなく尋常小学八年の課程を卒業致しました、数へ立てれば此の八年間には父の病死、姉の結婚など、お話の種も尠なくは御在ませんが、要するに私の周囲に生つた事件は皆な私の心持を暗い淋しい方へ誘ふ事ばかりであつたとお察し下さいまし。ですから小学を出る前後にもなれば、世間の娘御達は赤の半襟、色の帯、簪の好みは云ふ迄ありません下駄や雪駄の緒にまでも贅をお尽しなさるのが習慣ですが、私だけは其の仲間を外れて、髪飾もせねば化粧もせず、ツンツルテンの衣服を着て書物と睨めツ比を為て居たのでございました。併し父と死に別れ、姉を嫁づけましてからは、母の興味が多少私に注がれるやうになつて、何かの時には「白粉を塗れ」とか「縮緬の帯をゑめる」とか申し初め、自分から櫛を採つて私の髪を上げて呉れたこともありました。

▲私とても娘気 は有つたので御在ますから、それを嬉しいと思はないではありません、殊に身体は人様並に好く發育致しまして、小学を出た時には最う好い加減の娘になつて居たのですから出来るならはお友達のやうに赤い服を着て見たいと思ふのでした、けれ共申し上げました通り「汝は不容貌だ」と云はれ続けた言葉が余りに深く私の心に刻まれて居て「私は醜婦だ」といふ觀念が何事を為るにも先に立ち引込み思案と陰鬱とが直ぐ伴なつて来るので御在ました。尤も私が十五六になりましたからは、よく母が「汝も大分容色が直つた」と云ひ／＼致しましたが、私には怎うも夫が信用出来ません、何だか母が私を慰さめる為め心にもない事を云ふのではないかと、つひ疑心を起します、那麼風ですもの、稀に娘らしい風俗なりを為せられまして

▲お化粧の後で鏡 を見るのが世にも辛い苦しいことに思はれ、よく／＼促がされてからでなくては決して鏡を見ないことに致して居りました。本当に私は晴衣を着た時ほど肩身を狭く、何とも形容の出来ぬうら悲しさ、物淋しさを感じたことは有りませんでした。その心持を

▲悲しかった想出　として、人生の真面目な事実としてお話しするので御在ます。悲しい想ひ出とは何？ 皆様はもうお察し下さるでせう。私のその初恋は浮雲に画を描いたのと一つ、乱て散つて、直ぐ消えて了つたのです。余りに儚ないお話ですが、初恋とは大抵恠うしたもの、男の心を知ること出来ず、自分の胸を打ち明けることも出来ず、恥かしさと恐しさとに悶えて居る中、その人が急に遠方へ立つて了ふ様なことになり易いものです。そして私の場合にも、事實は全くその通りで御在ました。私は美しい初恋の夢を見るまでもなく冷かな風に眼を覚まされた薄幸女。もう／＼忘れても男のことなどは思ふものでないといふ決心致しましたのは、一方から云へば、私の苦痛が浅くなかつた証拠にもなるで御在ませうか。それは兎に角、其の後の私は再々枯木寒巖に拠つて

▲三冬更に暖気なし　と申しませうか、自身の身内に血があるか肉があるか、それさへ解らぬやうな、女の馬車馬か、聖教の尼僧かのやうな心持になつて一心不乱に勉強致しました、殊に読書に耽りましたこと、よくもあんなに読んだと思ふ程で御在ます。けれ共此処で申上げ度いのは、其の頃の私の心持が、初恋を意識した昔に比べて、決して同じではなかつたことです。一度火に焼かれ、ば焼かれるだけ、鉄は鍛はれて堅くなります。一度染めた紅筆は洗つても／＼真白くなるものでありません。私の心も一度たび使つた紅筆、火を潜つた鉄。同じく女らしからぬ心持とはいへ、「女」を意識してからの心持は、昔から見て確かに複雑にもなり不純にもなつたので御在ます。

(六)

▲女学校を卒業　致しましたのは丁度廿二の歳で御在ましたが、私は尚ほ学業を続けて同じ女学校の専修科に踏み止まりました。唯今から考へると其の頃は日本の女学校が大分盛になりかけた時でして、東京では男女交際会や、あの有名な鹿鳴館の舞踏会や色んな上つ皮の文明が伝へられ、洋服を着る女、帽子を冠る女、それはもう、随分可笑しな

事が流行つた時代でした。で御在ますから、若し私が東京の女学校に居て、専修科に止まつたとすれば別に変なこともありませんでせうが有繋に広島のような辺鄙の地に在る女学校では、皆様大抵、五ヶ年の普通科修業を待ち兼ねて直と結婚を為さいました。つまり専修科などに残るのは一生を伝道事業に捧げやうとか、学問で身を立てやうとか、何れにしても異つた志の人ばかりで、それが又、よく訊いて見ると十中の七人は

▲失恋とか不遇　とか必らず数奇の運命を抱いた方で、一口に云へばよく／＼の売れ残り、人数も尠なく美人も尠なく、何処にかう、肌合の異つた女ばかりでした。私も其のお仲間入りをしたので御在ますが、専修科になつてからは、普通科生と比べて多少の自由も利き、生徒としての旧顔でもあり、何彼につけて我儘も通るやうになりました。併し春から秋へかけて、つい此間迄は同じ教室に机を並べて居たお友達が、誰れ彼れとなく結婚を為さる、その通知書を頂たく度に、私は云ひやうのない淋しき、腹立たしさを感じないでは居られませんでした。嫉妬ですとも、嫉妬に相違ないのですが、其の時は嫉妬だと自分で思へませんでした。否え、さう思ふのが嫌だつたので御在ます。ですから、其の心持を蔵す為めに、出来るだけ私は軽躁でも見ました、禅学の本を読んでも見ました、謡曲の御稽古も致しました。けれ共結局は

▲あゝ私は孤独　だ、何時まで経つても／＼孤独ぼつちだといふことを深く感じるんで御在ました。すると急に年が老つて了つて、元氣も面白味もないやうな氣になり、夜など御部屋で読書して居りましても、寧ろ此世が味氣ないとも思はれました。怎麼時に、若し「あの入」でも来て下されば、その胸に顔を押附けて泣いても見度いと身悶いたしました。お笑ひ下さつては困りますが、其の頃ほど、私は「あの入」のことを激しく思ひ出したことは御在ませんでした。其の為に折角冷たくなつて居た心が、どれほど掻き乱され、燎えたてられましたが恐らく皆様の御想像も及びは致しますまい。処がふとした機会

から、私の心が急に又若くなりまして、感情の満足を与へられるやうになつたので御在ます。

(七)

▲感情の満足 とは他でもありません、畢竟第二の恋が出来たので御在ます。併し第二の恋とは申しましたが、以前のは極々靡ろげな片恋、然して今度のは相恋、ある意味ではこれが本当の初恋かも知れませんが、どちらにしても今の若い方々が一度出合つて直ぐ恋になり、それを平気で何度でもお繰り回しになるのとは、大分異つて私のは極時代的の、犠牲もあり涙もある恋でした。事の生りは私が二十二歳の秋、ある日曜日のこと、私達五六人は舎監に付き添つて市外れの某花園へ萩の花を見に参つたことがあります。心ゆく秋の眺め、萩の下露に足を濡らして歩いて参る後から、若い男の声で舎監を呼び留めたのが聞えました。舎監は一目振顧ると「まあお前！ 何時お出でだったのだい？」と心から驚いたのです。「唯、今」と

▲青年は莞爾に会釈して「学校へ行つたら萩を見に行かれたと云ふから追蒐けて来ました」「それはまあ」といつた風で暫くお話が交されてから「これは遠方から来た私の甥です」と舎監からの紹介に皆な会釈を致しましたが、私は如何でせう！ お辞儀も忘れて、時も処も忘れて其の青年に見入つて居たのでした。ハツと気が注いで、真赧になつて御挨拶は致しましたが、もう其刹那から私の心は狂つて了つたので御在ました。不思議と申しませうか、其青年は年こそ二十三四を超すまいが、声といひ調子と云ひ、中にも顔や肩つきの風が、恰で兄弟ではないかと思ふ程私の「あの人」……絶入やうに想つてゐたあの人と瓜二つなんで御在ますもの。其日それから怎うして寄宿舎に帰つたか、私はお話しをする今でさへ、尚ほ夢現のやうに何事も覚えては居りません、たゞ嬉しさと恥かしさと、余りの不思議とに嘆息さへ忍んで居ましたが、舍へ帰ると直ぐ自分の部屋へ駆けこんで、

▲大声を上げて泣いたことだけが今更のやうに思ひ浮べられます、

併し舎監の甥といふ青年の傍は忘れず、其夜を夢に描いて寝ましたが、翌日からその青年が毎日のやうに舎監を訪問致しますたび、私の念は次第に激しく強くなりました、禅学も読書も棄てゝ置いて、其人の来る時間を怎麼に待ち詫びたでせう？ 其頃学費の都合で舎監の書記を致して居りました私は寄宿舎の方へ足音が近寄る度びに、心を跳らし、耳を傾けて幾日も経ぬ中に到遂其の青年の足音を聞き分るやうになりました。「叔母は在ますか」と問はれて「はい」と云ふ時の嬉さ誠に他愛もないことに心を使って居りましたが、其中その青年が神戸の某学院の出身者だと知り、多分来春から私共の女学校の教師になるだらうといふ事、それ迄を広島に在て教会を助けるといふ事などを耳に仕て、一つ／＼を自分の事のやうに喜んで居りました、私はもう自分の不器用なことなどを顧みる暇もなく、たゞ全心を傾けて、其青年と顔を見合せ、下らぬ短かい挨拶を交はす時間を待ち焦れて許り居たので御在ます。

(八)

▲相愛の情を了解して、心の底の秘密を語り合つたのは其歳の冬、クリスマス前の晩で御在ました、勿論肉体の關係などはありません。たゞ自然と近寄つた心の一致と申しませうか。二人の考へ方は極めて真面目なもので御在ました、併し私に取りましては、人様から、「愛する」といふ一言を聞いた丈で、もう死んでも可いと思つた程の満足で御在ました。愛は死んだ女をも甦らせませう。殊に自分の醜いことを知つて居る女が、人から愛された時の心持……「醜女の深情」といふ諺を私は最も鋭敏に思ひ當つた者でした。況て人に優れた青年から愛を示されたのですもの、私は悉く感激しないでは居られませんでした。

▲瑞々しい処女心 は喜びに充たされました。全く其の頃ほど私の顔が幸福の光に輝いたことは有りません。けれ共二人とも熱心な基督教徒で御在ましたから、各自に守るべき所は守り、抑えべき所は抑え

て、徒らに意馬心猿を趁ふて走るやうな行ひは致しません。たゞ日毎に見交す眸の中に、窃かに交す手紙の中に、燃る心を語り合ふのが常のことでした。併し其の辺の消息は之れ位にして暫らく皆様の御推察にお任せ致します。たゞ此所では非共申上げて置かねばなりませんのは、其の冬を越したばかりの正月にふとした失錯から火を出しました、

▲寄宿舎が丸焼の災難 に遭つたことで御在ました。従つて寄宿生は急に夫れぐの家へ預けられたのですが、私は牧師の世話で、教会の女執事を務める某未亡人の二階へ当分の寄宿をお願い致しました。此の未亡人とは平素教会で目にも懸りお話しした事のある知合なので、色々と信仰上のお導きも蒙つて居りましたが、扱て其のお宅へお世話になつて見ますと、予て信心堅固だと存じて居た未亡人が案外嫉妬心の深い、何彼につけて感心の出来ぬことばかりなので、寄宿舎に居た時と比べて私は却つて

▲一層堅固な籠 に入れられたやうで御在ました。譬へば外出を致しますにも、一々下女を附けるとか、でなければ後から私の行先を調べて回るとか、随分變に気を回した方でした。会々国から若い男が訪ねて参りまして自分立ち会つた上でなければ会はず、手紙が参りまして有繋に自分で開封は為さないまでも、誰から何を云つて来たかと、妙に立ち入つたことまでお訊きになる。其時代私が柔順であつたから好しかつたやうなもの、今の私なら其の失礼を責めてやると思ふほどの事が毎日でした。此頃喧ましい「女十五ヶ条」より、もつとく／＼酷い御婆様といへば、大抵どんな種類の未亡人かゞお解りになりませう。所が困つたことには、その未亡人がどうやら私共の恋を勘付いたらしい一件が持ち上つたので御在ました。

(九)
▲未亡人は梟の眼 を持つて居りました。明るい中の事は見えないに
関はらず、暗中のことと云へば土鼠の恋も見透すといった人でした。

で御在ますから、忍ぶれど色に出たがる恋、包むに余る私共の恋が目に着かないで居る筈はありません。先づ第一に、従来意中の青年が学校へ舎監を訪ねる度びに交換した手紙が郵便で参ります、それへ未亡人が眼を注ぎました。「これは○○様からぢやありませんか。よく来るやうだが同じ町に居て何が用なのですか」と皮肉な問を蒙るはまだしもの事、折折遅く帰りますと留守中に届いた手紙の封じ目に變になつて私の机の上に置かれてあつたり、大事に藏つて置いた文反古がかき乱されて有つたり、實際堪まらないやうな事ばかりでした。遂には私に對つて若い男女の交際は危険だから、あの人（と私の青年を指名して）とは語を云はない様になさい。手紙は勿論可けません」と

▲露骨極まる忠告 でした。併し熱し切つた二人は、然うした忠告に耳を傾むけるだけの心になれません。矢張り教会の集會や、学校からの帰り途に、淋しい街で顔を合はせ、果敢ない言語を語り合つて居りました。けれ共、恋は熱する処まで熱しなければ醒めるものでありません。さうして私共の熱は次第に高まる一方でした。心と心とが相食んで尚ほ飽かぬやうな思ひでした。私共は四五ヶ月の後には、来るべき其日を待ち兼ねてとう／＼窃かに約婚指輪を取り交せたので御在ました。勿論、それは誤まつてあたに相違ありません。けれ共、愛の前には日月も光を暗くすると云ふぢや御在ませんか、善惡の標準を以てお律しになつては困るので御在ますよ、所が例の未亡人ですね、忠告の効果が無いと解つたので

▲最後には疳癪 を生しまして、「私の忠告が聞けなければお気の毒だがお世話は出来ません、それ許りでない私は公然貴女の行為を発表する」と、侮辱にも程のある人困らせを初めたのです、今の私ならば、「あら然うですか」位でずん／＼そんな家を出て了つたのでせうが其の頃は始終胸の痛さに悩む処女氣でした。口惜しいとは思ふのでしたが、弁解も出来ず反抗も出来ず泣いて黙つて、謹慎を誓はせられました。一体クリスチャンに慫うした未亡人の多いことは、伝道上にも余程の損害だらうと思ひます。だから私はクリスチャンの未亡人が七里

骨灰なんて御在ますよ。併しまア夫は夫に致しまして、困ったことが今度は私共二人の間に急に涌き上つて参りました。

(十)

▲咲かぬ間の夜嵐 急に話し度い事が出来たから会ひ度いといふ手紙が一日私の意中の人から参りました。都合をつけて出會つたので御在ましたが、話を聞いて見て驚きました、と云ふのは怎うやら彼が洋行を為らしたので御在ます。予て洋行し度いくと云つて居たのも、その出身した神戸の学院の西洋人に連れて行つて貰ふ約束の有ることも聞いて存じては居ましたが、先日西洋人から手紙があつて、或は急に帰国するかも知れぬ、帰国するとなれば君を伴れ度いか差支は無いかとの事だと云ふのです。而して怎ういふ機会は滅多にない、男児の抱負を満たす機会は今度である。「けれ共」と彼は調子を更へまして「僕は既に昔の僕一人で無い。貴女といふ人が出来た今日は、自分一人で自由の行動をとることが出来ぬ。此の場合の所決は是非とも貴女とも相談の上にし度いと思ふが、怎うすれば可いだらう?との事でした。此の相談は結局

▲學業と情愛の満足 と其の那れを採るかといふことになるので御在ますから、私も騒ぐ胸を抑えて色々考がへて見ました。意中の人を遠く海外に送るのは、素より情として満足の出来ない事ですけれ共、深く考へて見れば、一時の女らしい感情に支配されて百年の悔を残すよりは、暫くの苦痛を忍んで他日の大成を期した方が遙かに可いと、さう私の意志が決定する下から、感情の波が動いて、取留めもない不安の念悲哀の涙に驅られるので御在ました。で其の日は、行くにしてもまだ時日も有ることだし、不取敢西洋人へは行くと申し送つて置いて、愈々の日取までに出来るならば結婚もして置き度いと云ふやうな、大まかな下相談だけで立別れました。処が四五日経つてまたく青年から手紙が参り、事件の思つたより急になつたから、

▲是非に今晚出會ひ度い との事でした。「私はもう焦々致しまして、

直ぐにも飛んで行き度いと思ふのでありましたが、何うでせう、例の邪魔者が入りました、夕方になつて出て行かうとする時、未亡人が私を呼び止めて「夜分の外出はお謹みなさい」と被仰るぢやありませんか。あゝ此の引裂けさうな胸の中が見えないのか!と私は地団太を踏んで、舌を喰切つて死んでも飽足らない氣持で、苦痛を忍んで其夜を二階で泣き明かしました。無理に反らつて出れば出たのでせうけれ共、私はさうも出来ませんでした。口惜しい、悲しいで其夜を明かし、翌日の朝早く彼を訪ねましたが、彼は私を迎へるなり手を握つて、「運命が迫りましたよ!」と泣く様な声なので御在ます。そして私の前に、西洋人からの手紙を投げ出して、「まア御覽なさい」と云はれる儘口私も夢中になつてその手紙を読んで見ました。

(十一)

▲西洋人の手紙 には極簡短に「出立は来月五日と定む、今月中に準備を調へて神戸に來れ」と人の心を知らぬ軽やかなペンの運び、今月中と云つても残りは僅た一週間なのでも、私は急に突き放されたやうな氣になつて、黙つて泣いて了ひました。私の泣いて居る間、彼方は腕は拱ぬいて何か考がへて居ましたが、唐突に寧そ止ませうか」と云ひ出したのです。「米國へ行くのも嬉しいが、さう貴女を苦しめて迄も洋行する必要はない。僕は勉強も事業も悉な我等の恋の為に犠牲にして可い」とさも思ひ込んだ調子を見ると私は何と云つて好いか、感情が極度まで激昂して了ひました。果ては彼の膝に身を投げて「行つて、行つて!」と狂氣のやうに繰回す許りでした。男の心はよく解つて居ます、此の不容色な私の為め

▲一生を犠牲 にして呉れやうと云ふ、其の志が嬉しくなくて怎うしませう。私の勝手を云へば、それは行つて貰はない方が好いに決つて居ます。僅た一日相見ずに居ても、千里隔秋の心に堪へられず、會は會ふにつけ、会ねば会ぬにつけて、疲れるほどに胸を踊らせて許り居ましたものが離れて遠く隔たるといふこと、私には那麼事を考へて見

るだけの勇氣も御在ませんでした。けれ共又、私は自分の情の爲めに、男の前途を害し、事によつてはそれを殺して了ふかも知れぬだけの決心を為る勇氣も御在ませんでした。況して男が自分から自分を犠牲にする云ひ出しましたのを、怎うして甘受出来ませう。男が五分の犠牲を払ふならば女は十分の犠牲を払ふべきものと教育されて居ました私は、殊に此の場合、譬へ死ぬほどの苦しさを忍んでも、自分を犠牲にするのが当り前だと信じました。それも之れで別れて了ふといふのでなく暫くの時を待てば、屹度

▲将来は恋の凱歌 が歌へると判明して居るのです。然う思ふと。将来の光栄が目の前に浮んで、自然と涙も納まりました。私が元氣を取り直して、その心持を彼に話しますと、彼も倏ち勇氣を感じたので御在ませう、「貴女が其の覺悟でさへ居て下されば、僕は本当に幸福だ。貴女の愛に励まされて一生懸命に勉強することが出来やう。永いと云つても五六年は夢のやうに経つ。それにお互にまだ若い、何うか愛と信仰と誠実とを守つて将来の幸福を待つて下さい」と心の底から嬉しさうな声でした。而して「神戸へ行く迄には一週間しかないから準備は出来る丈け早くせねばならぬ。就ては今日の午後から広島を發つて備後の山奥にある親戚へ暇乞に行かねばならぬ。三日目には多分帰つて来て、今一度悠くりお話をして置き度い」と云ふのでしたが、有繋に其の時だけは、話してもく飽き足らぬ此の短かい時日の半分を、たゞ暇乞の爲めに国へ帰らうといふ男の心が、怎うしても解らず、余りに情なくはなからうかと、たゞ夫ばかりを怨んだので御在ました。

(十二)

▲待ち抜た三日目 も暮れましたが、帰つたとも帰らぬとも、男からは何の便も有りません。まさかに彼の家を訪ねることも出来ず、夜すらも苦しい夢に明かしましたが、その翌日も便がありません。辛と五日目のお午後に「今夕天神の社にて」と、会合の場所を知らせて参りました、人目を忍ぶに都合のよい其の夕方、私は窃と未亡人の眼を

逃れて、近くから車を急がせ、市外れの天神へ急がせました。待ち合せて居た彼は私を連れて神社の背へ参り「済まなかつた」と真蒼な顔をして居るぢや御在ませんか、そして「思ひ懸けのない用が出来たものだから……実は結婚問題が……」と聞くなり、私か覚え「えッ」と声を立て、驚きますと、「ナニ」と男は淋しく笑ひまして「併し到頭拒絶しましたから心配しないでも可いでせう。たゞ親類と云つても備後には祖父が在るもんだから夫で喧ましかつたのです」と、暫く然うしたことを話した後、彼は言葉を改めて「僕の出発は明日の正午に決めなければならぬ、或はこれが

▲当分最後のお別れ になるだらう、今夜も家の都合で残念ながら永くは話して居られない。就ては、お互の心はもう了解し合つて居るけれ共、世間には時と処とを隔てられると、それで初めの誓ひを忘れて了ふ例が多い。我等の間だけは是非それに習ひ度くない。又那麼悲しいことにならうとは怎うしても信じられない。繰回す必要はないが、お互はお互の恋を完成するまで決して境遇や時の力に敗けてはならぬ。僕は全心を貴女に捧げる、其の代り貴女の全心を預つて行く」と私の手を握つて固く、其の心を誓つたのでした。私はたゞ其の手を握り返したゞけで「決して忘れません」と囁いた外には、余りに動悸が激しくて、何一口も云ひ得ませんで御在ました。薄暗がりの大空に星冴えて、其夜は仄かに桜の匂ひが夜の空氣を激ませて居りました。思へば

▲果敢ない別離の会 袖に縫つて引き留めることも知らず、また会ふ日の何日なるを確かめる術もなく、慌だしげに立ち別れて了つたので御在ますが、私はもう悲しいとか辛いとかいふ心持は通り越して、何だか直接に恐ろしい、大きい、反抗することも逃げることも出来ぬ自然の力とヒタと顔を合しその眼に睨まれながら、その力に引づられて行くと云つた風の、何とも形容の出来ぬ感情に裹まれて、寧ろ自分一人の悲しいとか辛いとかいふ感情は忘れて居たやうで御在ました。嗚呼さうして、遂に翌日の正午!

(十三)

▲古来征戦幾人還 恋の戦場も恰度其の通りで御在ます。若し幾万の恋人が、この戦場に斃れることなく、皆なお互に手を執つて首尾よく凱歌を奏し得るならば、此世にキューピットを恨む者は御在ますまい。さて私共が一度相別れての後は御推察にお任せ致しませう。無事に米国へ着いた、大学へ入学した、勉強して居るといふ様な報知が引続いて参りましたのは勿論、便船の度に細々と書き送る文の種が好うも続くと思はれる程で御在ました。私とても心持は同じ事、出来るならば日文も書き度いと思ふ程でした。併し別離の当座こそ然うで御在ましたが

▲追々分別の心 がつくに連れ、慍うした表面の騒ぎを為て居ては可くない。既に絶対の信用を仕合たからには、此処は一つ落着いて、出来るだけの勉強をして、彼の成功を待つの外はないと、我れながら賢くも決心を致しましたので、態度を改へて勉強に身を入れましたが、それと同時に、従来五度やつた手紙なら三度、三度のものなら一度と、次第に往復の数も尠なくなり、書きます文句も真面目な分子が多くなりました。かう云ふ境遇になりますと、結婚は致して居りませんでも、もうお互に夫婦のやうな気持になるものと見えます、彼からも手紙も次第に泌々とした、老成ぶつた事を書き送るので御在ました。然うして、淋しい中にも心楽しく、果敢ない中にも信ずる所、頼る所のある三ケ年を送りましたが、私は次第に卒業の時期も近づき、何彼と心忙しくして居りました二月のさる日、久し振りに参りました彼の手紙で見ますと、まア怎うでせう！「申訳は立たぬが、

▲お互の婚約を破棄 して呉れ。其代り自分も一生結婚しない、事情は云へぬが弁解もせぬ、嘸御立腹だらうが何事も無い昔の夢と諦らめて呉れ」と、今思ひ出します丈でも腹の立つやうなことを聞かされました。事情と云へば何事でも事情ぢや御在ませんか。その有りふれた口実に蔵れて突然にかうした卑怯な事を云ひ出した男の心持が、怎

うしても私には解りませんでした、私も其頃二十五歳と云へば女としては一通りの判断も世智も出来た筈で御在ます。冷酷な手紙を読んで、悲みましたが、一時、私は直ぐ心を取直して男の方へその理由を訊ねてやりましたが、続けて五六通の書面を出しましたのに一通の返事も御在ません。私は其の当時の、腸を掻きむしられるやうな悲痛、悔恨死ぬ迄忘れることが出来ませんでした。私は弄られました、欺むかれました、活々としてゐた心を殺されました。あゝ一生に僅た一つの私の恋は、かうして遂に亡き骸に入つたので御在ました。

(十四)

▲脆も羽の破れた蝶 は、もう飛で見る勇気も御在ませんでした。喘ぎながら僅かに命を續けて居るといふ有様。眼に触れますこと心に映りますこと、凡てが私を絶望の谷へ落さうとする悪魔の詭計としか見えません。谷の底に居て上を仰ぐと、一切のものが倒しまにしか見えないもの、私は、もう其の絶望の谷底で呻々唸り続けました。一度落ちた所を何うして上れば可いか、それを考へる余裕の有らう筈がありません。たゞ何時までもく凝然として、覆ひ被さつた黒雲を睜め、音もなく響もない中に凄まじくも打ち寄せては打ち回す自分の心の声に聞き入つて居たい。聞き飽きてく、過去現在の記憶が消えるやうに死んで了つた時を待つて、若し生れ代ることが出来れば

▲新しく生れ代つて見度い、と然う思ふのでした、事実、私は凄然して、胸に手を措いて、破れた羽を打ち頼はせながら凝然として居りました。すると生れて物心ついてから此方の事が、潮のやうに胸を衝いて湧き立ち回るのでした、悲しい事に会つた後ほど、人の心が真面目になり感覚が鋭くなり、如何な微かな事でも心の耳に聞こえる時は御在ますまい。私は死んだ父の声を聞きました、母の声を聞きました、「お前は何故恋をしたのだ」と一つの声が申します。「恋といふものは何うしても顔だよ」と一つの声が申します。舎監の声、未亡人の声、恋人の声、お友達の声、ありと凡ゆる声々が、私の不幸を責めた

り、悲しんだり、笑ったり、嘲つたりします。併かし夫れを聞いて居ると、私自身には別に悲しいとも口惜しいとも思ひませんでした。何か静かな心持になつて、他人の事を聞いてゐる様に、薄ら淋しくはあつても、差迫つて飛立たねばならぬことのやうには思はれませんでした御在ました。本当に其頃ほど、色んな事を思ひ、考へたことは御在ません。恐そらくこの時代が

▲私の一生の大転機　であつたのだらうと思はれます。その夢のやうな時代に学校を卒業して、久し振りで国へ歸りました私は、次第に年老つて行く母の姿を見ると同時に、弥々春を葬つて、新しい夏へ進まうと決心しない訳には参りませんでした。それに成人して行く弟や妹があります、家は益々疲弊の極に達しやうとする。事実私は気が気でありません。つらく考へるに怎うも間違つて居た、姉が結婚した後此の家の責任は云はずとも私の肩に在る、その責任者が浮々として騒いで居られる時でない、殊に学校を卒業したからには、何か職業を発見して妹や弟の学資も輔け、母にも幾分の安心をおさせ申し度いと思ふに連れ、私は翻然として悟る所が御在ました。それは私の生涯が犠牲の生涯であるといふことを覚りましたので、会々不色に生れて来たことも、失恋をしたことも、皆な此の運命の爲めであつた、と解りますと共に、「私は最早女を廃め！」私は然う心にも叫んだので御在ます。そして其の通り母に話しますと、母は老眼に涙を溜めながら、何も云はずに笑ひました。私も笑ひました。笑つてくそれで初めて、生れ代つたやうな、何とも云へぬ清々しい心持になることが出来たので御在ました。

(十五)

▲既に犠牲の生涯　と観念し諦めましたからには、よく云ふ雨降つて地固まるの譬へ通り、私の心も確かりとして、それ迄にない強味を感じ、八風吹けども動ぜず天辺の月と、生覚えした禅語のやうに、其処までは悟り切れなくとも幾らか余裕を持つ事が出来るやうになりま

した、然うして居る中に、差し当つてと云ふでは有りませんが家産も大分失くなつた時分ではあり、何か職業を求めて私の決心を實行しなければなりませんので、母とも相談の上弟を広島の中学院に、妹を私の卒業した女学校へ、何れも入学致させますと共に、私は再び慈母の許を離れて、今度は愈々浮波風の吹き荒む実社会へ立ち交はる爲め、仕事の口を求めて広島へ出ましたが、恰度京都の某女学校に教師の口があつて其処へ赴任することに決めました、京都の女学校も矢張り同じ宗教学校で、私は当分下級生の英語と国語とを受持つ事になつたので御在ました。

▲生れて初めての独立　に就て私の得ました感想も色々御在ますが、概括んで申せば武士が初めて戦場に起つた時もあゝで御在ませうか、昨日までは唯だ練習したに過ぎなかつた事を今日は実地に発表するので御在ますから、最初は胸が動悸致しまして、その様子と云つたら、随分変なものでした、けれ共私は初めて講壇に立ちました刹那、何とはなく雄々しい感慨に打たれ、いま自分が選んだ職は果敢なく微さい事であるが、自分はこれによつて独立し、弟妹を輔け、母を安心させることが出来る、怎うぞ他に心を散らさず、一心不乱に働き度い！と然う思ふので御在ました。然う思つて事に当れば、一つとして不愉快なことはなく慣れゝば慣れるもので、一年ばかりの間に生徒との馴染も出来、自分から申すのも可笑しう御在ますが、彼女は若いけれ共確かりした好い教師だつたやうに、校長や理事に囑望されたのでした。処がまア、私のやうな運命の者には幸福の日は永く続きません。二十七八歳の秋頃から、毎月一度は身体具合が変になりまして、プラ／＼して居りましたが、次第に重くなつて月に五日は床に就き、それが七日間となり、十日間となり、翌年の春、木の芽が萌します頃には遂に遂にしい神経衰弱の爲め、教職に堪へられず果ては

▲病床に埋まる身　となつたので御在ます。然うして久し振りに淋しく詫しい日を送るのですが、何う云ふ訳ですか、熱のある時分には、米国にある彼人の佛が浮びまして、私の名を呼んだり、手を合せて泣

いたり致します。それが度重なるに連れて、不思議にも、あれ程鍛錬された筈の私が別離前後のやうな感情的の、焦燥した、泣いて許り居る人間にやつて了ひました、あゝ何日まで経てば本当の堅固な心になれるのか、私ももう自分の腑甲斐なさにホト／＼愛想が尽き果てたので御在ましたが、仕方がありません。女の弱点を藏すことも出来ずに日を送りました。それで、三ヶ月程して床は離れましたが、それからと云ふものは、絶えず発作的に神経が動いて、その酷い時には立つても居ても、居られぬ位に胸苦しく、その容体で考へて見るにどうやら正真疑ひ無のヒステリー患者になり済まして居たので御在ませう。

「あゝヒステリー！ヒステリー！」と私は然う打ち叫んで、一人で部屋に泣き伏したことが、今から思へば幾百度で御在ましたでせう？

(十六)

▲私の性格の変化　も余程その間に目立つて数へられるやうでした。御存知の恥かり性が、次第に消え去りまして人様の前でも何でも、自分の思ふ事をずん／＼云つたり為たりする。云はゞ女らしい処が無くなつて、男のやうな処が増えて来たので御在ませう。夫に意志、と云へば立派さうに聞こえますが、実は片意地になつて、頑固になつて、人様が右と云へば私は左、左と被有れば私は右、随分なあまの、じやく、にやつたので御在ました。多少はヒステリーの所為も有つたに違ひありませんが、男性的になつたのも事実で御在ます。妙な事には、言葉使ひまでが變て参りました。親しい友達などに対しては、何時も男のやうな調子で話しかけるので御在ました。一方、私の病氣は激烈な急性的な発作だけは、辛と療治が届きましたけれ共、困つたことには、

▲急性よりも悪い慢性　のヒステリーになり、それ丈は今に至つて何うしても治りませんで御在ます。然うして三十歳近くまで独身で暮して居ります間、どうにか慫じにか、心中の苦痛を忍んで色に露はさぬだけの鍛錬を積むことが出来ました。けれ共感情が失くなつたのは御在ません。寧ろ那方かと云へば昔よりも鋭敏になり、男女の間

の秘密や、曲折した世事などは十二分に推察が出来るのでありましたが、夫をたゞ知らない顔をして居るのでした。露骨に申し上げると（お笑ひなすつては困りますが）私は強い情の刺激……心だけで満足した若い頃の恋とは異ふ、一種の苦しい衝動を感じたので御在ます。女一人前の健康な身体に生れついてゐながら、不具者のやうな生活を送るには、無限の苦痛を感じないでは居られません。不自然な節制に節制。それが余りに重なりますと、身体の何処かゞ狂つて、ヒステリーになつたり婦人病を生じたりするのは、世の中に沢山その例が御在ます。そして遂には

▲変成男子的の女　になるので御在ます。そして私も、実にその一例に過ぎません。残念では御在ますが、畢竟は生きたミイラなのです。此の血と肉とは、人生に何の関係も有りません。同じやうに御飯を頂き、衣服を着ては居ますが、人間ではないのです。非情の草木と一つなのです、否え、生中情を解する事が出来るだけに、一層の傷ましいものになるので御在ます。けれ共、兎に角活きてゐて、然う／＼絶対に情を抑へることの出来るものでは有りません、何処かに出口を求めて、通れやう働かうとするのが情の本質で御在ます。恋―男に対する恋は、もう／＼死んでも仕ない！と諦らめた人でも、何か他の方面で情を満足させないでは居られませんか。その結果は、お話しするのも気が差しますが、私は全然告白して了ひませう、遂に不自然な径路を迷つて、同性の恋、女と女との恋といふものが出来上るので御在ます、私はそれを大胆に懺悔して、出来るならば同じやうな迷に居られる多くの婦人方を警醒し度いと思ひます。

(十七)

▲情の満足　「数行空白」　永年独身で辛抱を仕通した老嬢の身になつては、今更ら結婚するのも恥かしく、さればと云つて人から後ろ指を差されるやうな事は仕度くない、畢竟体面を破つてまでも情の満足を得やうとは思はぬ。併し何所かに逃げ場所を作へないでは苦し（数

行空白」 予てお話し致しました西洋婦人なども、一体宣教師には独身が多い為めか、兎角に同性を愛人としたがります。「教行空白」情の欠陥も補はれる、それでつい顔さへ美しくければ学業の如何によらず、依怙最良な愛憎を示して女生徒を困らせるのですが、勿論色んな弊害が有りまして対者が自分の愛を受けない時、自分の愛を捨てた時、然うした時には随分如何はしい中傷を為たり何かして、浅間しい女の情念を極めて露骨に発表するので御在ます。殊に西洋の婦人が日本の

▲若い女生徒を誘惑 する手段は実に巧妙なもので、之れと眼を附けたが最後、何うしても射落さねば置きません、最初は物を与るとか嬉しがらせるとかして、歓心を買ひ、機会を俟つて、突然接吻などを致します。一例をお話致しますと、私が広島に居りました時分、同級の某といふ美人が、矢張り此の手段で婦人宣教師の寵愛を受けて居りましたが、普通部を出ると直ぐある会社員と結婚しました。御主人は非常に立派な方で、十二分の愛情を新夫人の上に注がれたのですが、新婦人は何うしてもそれに満足し兼ね、矢張り昔のやうに宣教師と不自然な愛を続けられる、不思議に思つて訊いて見ますと、「夫の愛も難有いが、自分は宣教師のキツスを忘れることが出来ない」との事でした。私は開いた口が塞がりませんでした、万事が然うした風で御在まして、西洋婦人の熱烈な愛が、時には強制的に日本の若い女生徒を痛め、遂には一生其の女を独身で了らせ、よし結婚しても家庭を紊すといふやうな事は、凡そ宗教学校と云はず、官立女学校と云はず、寄宿舎のある所には必ず行はれて居るので御在ます。そして此の悪風は日本婦人の間にも、殊に近頃は各学校の

▲寄宿舎の女生徒間 に行はれて居ますので、それを学校によつて「イチチ、ラブ」とも、「デヤレスト」とも、「ペット」とも色々に申しますが、名こそ異なれ、恐るべき不自然を敢てして、美しい感情を荒廃させて行くのは、思つて見るだけでも寒心に堪へません。けれ共こんな憤慨めいた事を申します私が、実は其の実行者の一人であつた

とお聞きなさいますれば、嘸お驚ろきで御在ませう。併しそれもお話為なければ、私の感情や心持の推移がお解りになりますまい。殊に秘密の多い女性の心持や生涯が御解りになりますまいと存じます。

(十八)

▲私の「デヤレスト」の事を申しませう。この人も可哀想な人でして、若い頃の境遇と大きくなつてからの境遇とが恰度反対になつたのです。富豪の一人娘に生れて、美人ではある、賢くはある、其の中にさる女学校を出てさる所へ嫁づく事になり、当人同士も喜んでゐましたのが、結婚間際になつて男が死んだのです。其の時に一生独身と覚悟してからは、女学校の教師になつたのですが、私よりも四つ歳下で、それは女らしい、柔順な性質なので、恐らく誰からも憎まれた事は御在ますまい。それが何ういふ運命でしたか、男のやうな私と全然仲が好くなつて、同じく寂しい寄宿舎の窓に同じ月を眺め、露滋滋庭に同じ虫の音を聞いて、飲むも悲しみも相煩つといふ、些度御想像には上りますまいけれ共、随分と美文めいた仲になつたので御在ます。まるで姉妹のやうな関係で、私の肌着の洗濯なども、人手に渡さず、悉な自身で為て呉れるのです。けれ共、慙うしたことをお話しする私の心持は実に

▲苦々しい記憶 に堪へず、良心の呵責に迫められないでは居れません。勿論お話す程ですから、唯今では純粹の清潔な生活を送つて居るので御在ますが、其頃の事を思ひ出すと、いまだに精神の汚れが取り去られぬやうな気持が致します。私は自分の悪かつたことを告白する機会を利用して、今の独身で居られる女流教育家に真面目に忠告致し度う御在ます。貴女方はみな立派な教育者で被在る、貞操を立て通して独身の苦痛を忍んで被在る、けれ共、貴女方の中で、窃かに御自身の良心に問ふて、何か疚しい記憶を抱いて被在る方はありませんか、女子の貞操は男子に対し又は単に肉体上の事のみではありません、私が今日までに経験もし、見聞もした実例によつて、凡そ独身で

在られる、堅固な女子教育家達を、悉く信じることは出来ないので御在ます。男女の關係を喧ましく取締るだけでは徳教の精神は決して満足されない。若し私の告白によつて、一人でも覺醒して下さる方があれば、それで私は満足致します。御免下さい、つひ話が岐路へ外れまして。さて私が

▲寂寞たる生活に満足 したかと申しますと決して然うではなかつたので、例のヒステリーに悩まれ、心は益々頑くなつて了ひ、一晚泣き明かしに明かすことも度々でした。所が世の中は広いもので、その狂気のやうになつてゐる私へ、二度ばかり結婚話が持ち上りました。一人は田舎の老百姓で母の方へ申し込み、一人は牧師で校長から話を聞かされました。其時に私の心がどんなに跳つたと思ひ召す？ 嫌なことで！と第一には顔を蹙めました、行かうかと惑ひ、行き度いと決し、さうして最後は、馬鹿な！気がつかないか好い笑はれものだ！と自分で自分を叱るのです。一つや二つ縁談が有つたからとて飛立つやうに結婚しては……といふ浅ましい女の虚榮が然うした真面目な場合にまでも附纏つて、私は遂に縁談を拒絶しましたが、後で思へば愚の至り、何故、あの時に結婚して、幸福な生涯を得なかつたかと、正直に申上げると残念で堪りませんでした。

(十九)

▲出来る結婚も為すに反抗的に日を送る私は、表面は益々厳かりした喜怒哀楽の一つ／＼の試練に会つても、微塵も顔色を動かさぬ、天晴堅固な女流教育家となりましたが、内心の混乱紛糾は怎麼で御在ましたでせう？ 其頃、学校の音楽館にある地下室へ、胸を抱いて泣きに這入る私の姿を見た人は無かつたらうと思ひますが、若しあつたとして、而して其の人が窃かに地下室を覗いて、私が全身を波立てゝ声をあげて泣いたり、又は喪心のやうになつて一つ処を隠めて居たりした処を窺つたことが有るとすれば、其の人は私の心中を洞察ことが出来たで御在ませう。音楽館の地下室は、全く私にとつて唯一の秘れ

家なので、私の「デヤレスト」と雖もこの秘れ家を知ることには出来ませんでした。怎うした涙の幾歳月！ よくも悲みの種が尽きなかつたものと思はれます。併し時の経つのは早いもの、その中に弟は中学を出て高等学校へ入り、妹は広島的女学校を卒業して私の学校へ転じて参りました。

▲私も既う姥桜 それに花も果もない枯木のやうな生涯、三十三の厄年を迎へました時には、有流に泌々と感じることもあり、もう怎うせ果敢なく通つて来た人生の三分の二、あとの一分を又同じやうな事に繰回してはならぬ。もうもう何も彼も諦らめて了つたと、夫からは多少残つてゐた結婚の野心も、若い心も悉く他人の事のやうに觀念し、出来るだけ情を殺して、我れと我が心を冷たく持つ修養を致しました。と一口に云つて了へば何でもない様で御在ますが、三十三と云へばまだ女の盛です、何処かに生温い血が流れてゐて、時とするところれが沸騰することもないでは有りません。下世話に三十後家は立て難いと申しますが、全たく女の此の時代に、我れから死んで行かうとするのは、並一通りの苦痛では御在ません。殊に世間の事は、もう一切知り抜いた時代ですもの、幾ら私が仙人だと云つても、多少の酸い甘いは弁まへられ、昔の自分の恋なども此頃の言葉で申せば、多少客觀が出来るやうになつて居ましたかと存じます。それは兎に角、何も彼も知り抜いたといふ時代ほど恐しい時代は有りません。世間の失錯は大抵此時代の人が為るんで御在ますね。だがその訳をお話する前に是非一事件を申上げねばなりません。

▲一大椿事とは何？ 私に取つては真に一大椿事、それは十年無音の恋人から手紙が参つた事なのです。さぞお驚きでせう？ 全然、私も喫驚致しました。何と思つて？ 何を云つて？ と顫へる手で封を切つた中には「明日午後四時四十五分御地へ着く筈、五時頃三条通りの某旅館へ御来車被下度は是非々々待上候」とやうな意味だけが、余程周章てたらしい筆で書いてあるのです。私は出来るだけ落着いてそれを読み回しました。読み回して「今頃何を云つてのだらう？」と呟

やきましたが、三分と経ぬ間に、私の心は平静を失つて了ひました。立つて居る事も座つて居ることも出来ません。私は人に藏れて、例の地下室の秘れ家へ、駆け足でもつて泣きに入りました。

(二十)

▲三条通の旅館を訪ねて、其翌日の午後五時過ぎに車を走らせました私は、昨日彼の手紙を受取つてから昨夜一晚、今朝から今へと雲と掴むやうな事を考へに考へ抜いた揚句です、凄然と疲れ切つて、屹度着い顔をしてゐると自分でも解るほど神経だけが興奮して居ました。実は寧ろその事出会ふまいかと考へたのですが、それも余りに飽きないので、出て来は来ましたが、心中では十二何を云はれても此方に敗る点はない、云ふ丈の事を聞いて、此方からも云つて、云ひ合つて了へばそれ迄の事だとも考へられ、さればと云つて、男が矢張り独身でゐて、自分に結婚を迫るやうな事が有つたら何としやう?と云ふ事も案じられます。併し兎や角の間に名差の宿へ車が着く、名刺を通じると向ふも恰度今着いた所らしく、直に私を部屋へ通しました。階子を上つて、彼の座敷へ近づき、襖越しにその声を聞きました時は、

▲十年以前の少女の血が一時に私の全身に沸立つて、静かに、併し夢中になつてその部屋へと入りました。「やア」といふ簡単な挨拶でしたが、下女に何か命じて去らせる彼の面影を一目見ますと、不思議では御在ませんか、今の今まで沸々と燃え立つて居た私の血が、急に凝結して、平素の冷たさよりは、既つと冷たい心になることが出来ました。何故であるか、それは私にも解りませんが、御在ますが、人間の心には折々微妙な激動があるものと承ります。私は冷たい顔で、冷たい態度で、冷たい声で別後の久潤を述べ、冷たい眼で彼の周章てた眼をちつと見てやりました。本能の作用で御在ますか、然うするのが、何か非常に復讐でもしてやるかのやうに思はれたのでした。彼の容貌ですか? 變つて居りましたとも、曾て俱に涙を頒つて別れました時

の佛は何所かへ消えて了ひ、鬚も生え、重味も出来て成る程立派な紳士にはなりましたが、眉から頬へかけて、いまだに忘れる暇もない昔の無邪気な所がなくなり、始終苦い事を味つてゐる様な色が見えるのです。彼はやがて思ひ決した風に話出しました。

▲僕は非常に苦心をした、貴女にも大した苦痛を味はせた。今までを無言で過した罪は誠に申訳がない。畢竟は僕の意志が弱かつたのである。けれ共いまは過ぎた事ゆゑ、弁解をしやうとは思はぬ。たゞ僕の悪かつた事を悉り白状して、斬るとも焼くとも貴女の御意のまゝの罪を受け度い、そのために態々やつて来た。貴女は検事で裁判官、僕は弁護士のない正直な被告人になりたい。たゞ夫れ丈の願ひだ」と、云ふ事が欺らしくも聞えませんが、「だが此所では怎うも話し難い、兎に角宿をだませう。」と、彼は旅装の儘の洋服で、私を戸外へ連れ出しました。だが御安心下さい、私は其の時、恰で裁判官のやうな、冷静な、緻密な心になつて居たのです。私は自分の意志を信じて、彼と一緒に郊外へ志して、街から街を歩きました。